

第136回くらしの植物苑観察会 2010年7月24日(土)

江戸の変化朝顔

岩淵 令治(国立歴史民俗博物館 研究部歴史研究系)

1 江戸の園芸と朝顔—鉢植え・「奇品」ブーム

日本において特に園芸文化が発達したのは、江戸時代の巨大都市でした。多くの園芸植物は大名屋敷の庭園に地植えされていましたが、やがて鉢植えが生まれ、17世紀後半から刊行された「園芸書」や、草木を売り歩く商人たちを通じて、庶民の中にも園芸文化がひろがっていったのです。こうした中で、薬として日本に入った朝顔も季節に愛でる花となっていきました。

一方、18世紀後半になると、都市の武士や富裕な町人、僧侶などの間で「奇品」(奇抜なもの)の育成がブームとなりました。こうした中で、突然変異で生じた奇花・奇葉を楽しむ、変化朝顔ブームが到来したのです。

2 変化朝顔の歴史

第一次ブームは、文化・文政期(1804~29年)に到来しました。その作り手は、奇品好みの園芸家・植木屋、そして作品の題材として朝顔に接した文人たちで、同好会(「連」・「花連」)を組織して、花を競いました。当時のブームを象徴するのが、朝顔を専門に扱った園芸書「朝顔図譜」の刊行です。このころの図譜は、図鑑的な要素が強いものでした。

やがて、第一次ブームは、天保・弘化期(1830~48年)にはさめ、多くの園芸愛好家の関心は小万年青や松葉蘭に移っていきました。しかし、嘉永・安政期(1848~60年)になると、変化朝顔ブームが再来します。この第二次ブームでは、植木屋と武家によって図譜が刊行され、品評会で評価された優秀作品が紹介されました。また、変化朝顔の作り手は、江戸が中心となり、さらにその周辺の町場にも広がっていったのです。

変化朝顔ブームは、明治に入るとしばらくをひそめます。ブームの再来は明治20年代のことで、種の交換を行い、品評会で各自の作品を競う愛好会が、大阪・京都・東京を皮切りに各地で設立されました。ちょうどこの時期は、旧幕臣の復権運動や、「江戸」の再評価が行われはじめた時期でした。じつは、東京で最初に発足した「あさがお穠久会(じょうきゅうかい)」の発起人4人のうち1人は僧侶、残る3人は旧幕臣だったのです。当時日本に滞在したアメリカ人のジャーナリストは、「旧大名旗本及其子息

等又戦争にて俄に身の上を作りたる新勃興者にして、せめて先祖の旗本より朝顔種子と口伝とを相続せしと人に思われんことを希望する輩は、皆挙て花の培養に熱心せり」と記しています。変化朝顔は、旧武士層を基点として、いわば「江戸」の花として再発見され、復活したのです。

今日も会の数は少なくなったものの、愛好会は活動を続け、変化朝顔を現代に伝えていきます。また、大正時代に入ると、大輪咲きの品種改良も盛んに行われるようになりました。

3 下総の変化朝顔

変化朝顔の愛好は、第二次ブームで江戸と人的・物的のかかわりの深い地域にひろがっていきますが、じつは下総はその主な舞台の一つでした。図譜には、江戸内湾の行徳（現市川市）と利根川沿いの陣屋町高岡（現成田市）の作品が載せられています。ここでは、成田・佐倉界隈の様子をみていきたいと思います。

利根川沿いの河岸安食（現栄町）には、明治30年代に「手長筋」という品種の栽培で有名になった大栽培家の斎藤武右衛門がいました。彼の回想録によれば、嘉永4（1851）年に竜ヶ崎や利根川沿いの対岸の河岸である布川（現茨城県北相馬郡利根町）の者などから種を入手して栽培を始めた、とあります。また、変化朝顔をテーマに、斎藤の家で和歌の会も催されたようです。すでに第二次ブームが始まったころには、この地域に変化朝顔の栽培家が登場し、地域の文化人の間でもはやされていたのです。そして、明治に入っても品評会を行うなど、地域の中心的な栽培家でした。

また、第二次ブームまでさかのぼるかは不明ですが、明治42年には成田で品評会が開かれています。中心となったのは、江戸時代以来の富農である中郷村（現成田市）の吉岡七郎兵衛と、成田の門前町の有力旅館小泉栄助でした。また、入賞者はいずれも現成田市・佐倉市域の者でした。

当館で変化朝顔の展示をはじめたのは、まったくこうした「伝統」とは無関係でした。しかし、何かこの地には変化朝顔の“縁”があるのかもしれませんが。

今年は、特別展示「伝統の朝顔」が12年目を迎えます。本館の第三展示室の朝顔関係の歴史資料の展示とあわせ、お楽しみいただければ幸いです。

.....

次回予告 第137回くらしの植物苑観察会 2010年8月28日（土）

「芸をする朝顔」 仁田坂 英二（九州大学大学院）

10:00～12:00（予定） 苑内休憩所集合 申込不要